

写実の殿堂をめざして (インタビュー要旨)



ホキ美術館館長 保木 博子

1 はじめに

ホキ美術館は、千葉市緑区あすみが丘にある写実絵画専門の美術館です。現在約500点の写実絵画を保有しています。年に2回展示替えを行い、常時約120点を展示しています。

写実絵画は、見たものを見たままに描く絵画です。しかし、写実絵画の大きな特徴は、作家の主観が表現されているということです。例えば、リンゴ一つでも、赤い部分が強調されたり、影の部分が強調されたりと人によってとらえ方が違います。同じテーマを扱っても、作家さんによって描き方や見え方、考え方の違いがあります。それが表現の仕方の違いとして現れ、伝わるものも違ってきます。

2 一枚の絵画との出会いから

ホキ美術館の創設者である私の父、保木博夫は、絵が好きで、様々な絵画を収集しておりました。日本の作家さんでよい人はいないかと探していた時、森本草介さんの絵画と出会い、衝撃を受けました。そして、森本さんの作品がどうしても欲しいということで買わせていただいたのが「横になるポーズ」という作品です。この作品を購入したことがきっかけとなり、もっとこのような日本人の描いた写実絵画があるのではないかと、コレクションが始まりました。

作品がまとまってくると、人に見せたくなるものです。年に一日、自宅をオープンハウスのような形にし、みなさんに絵を見ていた

だくことにしました。初めは一日200人から300人位でしたが、口コミで広がり、たくさんの方がいらっしゃるようになりました。中には飛行機に乗ってわざわざ遠方からいらっしゃる方もいて、一日1,000人位の方が来てくれるようになりました。一日にこれだけの数の人が自宅に来るので、時として身の危険を感じることもありました。そこで父が、「この企画をいったん閉めて、もっと大々的にやった方がよいのではないか。」と言い出しました。私はこの父の言葉から、まさか美術館をつくることになるとは思いませんでした。

しかし、父は美術館設立に向けて積極的に動きだしました。候補となる場所を探すために、私は父と、日本中様々な土地に赴いて検討しました。軽井沢や箱根など美術館が多く集まっている観光地も候補に挙がりました。

しかし、私たちは開館させた美術館をどう育てていくかが大切と考えていましたので、そのような場所では、家族の誰が通うのか、どうやって運営にかかわるのかという問題がありました。結局、今住んでいる千葉から引越したくないという父の思いから、自分たちの住まいのある千葉で探すことになりました。ちょうどそのころ、千葉市のあすみが丘東地区の区画整理が始まり、この場所を見つけました。父は「建物を見ただけで中に入りたいと思うようなものを作ってほしい。」と設計士にお願いをしていましたが、そんな建物を作るのにぴったりの、かわった形の土地だったのです。

3 作家と共に成長する美術館として

この美術館ができるまで、写実作家の方々には、作品を露出する機会が少なく、常設で展示する場がありませんでした。ですから、作家の方はご近所から「あの方、絵描きさんらしいよ。」程度の認識しかされていなかったそうです。しかし、美術館に絵が展示されるようになって、周りの認識が変わってきたり、身内以外の人から評価されたりするようになると、作家さんたちの中に「もっと頑張らなきゃ。」という意識が芽生えて、作品がどんどん変わっていきました。ですから、私たちは作家さんたちと一緒に成長する美術館だと思っています。

私たちは2013年から、新たな写実作家の発掘、応援のために「ホキ美術館大賞」を制定しています。これは、40歳以下の作家を対象に、3年ごとに行う公募展で、入選作品を当美術館に展示するというものです。

当美術館開館前の写実絵画の世界では、作家さんの数は多くはありませんでした。ベテランの作家さんが活躍をしていましたが、若い人が写実絵画を描くということは少なかったように思います。当時は、作家になっても40~50歳になるまでは、家族に働いてもらわないと生活できないという暗黙の認識のようなものがあったからです。この状態が続いたら、作家がいなくなってしまうという危機感がありました。若い人に注目してもらうためにはどうしたらよいか、若い作家に「将来明るいぞ。」と思ってもらうにはどうしたらよいか、そして一人前になるまでには時間がかかるという空気を払しょくするためにはどうしたらよいか等いろいろなことを考えました。

実際に自分たちができることを考えたとき、若い作家の作品に露出の機会を与えること、すなわち「ホキ美術館大賞」だったのです。

4 写実絵画の裾野を広げるために

もう一つ私たちが力を入れていることは、鑑賞者の裾野を広げることです。その一つとして、年に1回「スモールコレクション展」を開催しています。これは、4号程度の小さな作品を作家に描いていただき、展示します。お客様が欲しいと思った作品に札を入れてもらい、それを100%抽選で販売しています。画廊で絵画作品を購入することはハードルが高いのが現状です。そこで、ほしい作品を手に入れやすくするためにこのような企画をしています。コロナ禍前は、作家を呼んでギャラリートークも行っていました。「日頃どんなことを考えているのか。」「この絵はどういうときに描いたのか。」「若いころ描いた自分の作品を見てどう思うか。」など話していただくことで、作品や作家の方をより身近に感じていただく機会になっていると思います。

5 おわりに

10年前、父から館長を引き継ぎ、作家さんたちのお付き合いも長くなりました。長くお付き合いしていると、作家さんの作品が変化していくのを目のあたりにすることができます。それがとても興味深いです。これからも変化していく作品を見届け、世に出し、作家さんたちに寄り添っていきたいと思います。

最後に皆さんに私の思いをお話しします。最近、子供たちが絵を見る機会が減っているように思います。ちょっとでも興味があったらどんな絵でもとりあえず見て、好きでも嫌いでもよいので、自分の気持ちを表現できるようにしてほしいと思います。

ホキ美術館 千葉市緑区あすみが丘3-15
info@hoki-museum.jp